

# ふてしこ

# 5

'19  
No.282

巡回通信誌



Duomo Milan

## 「Speaker's party (演者の宴)」

名誉院長 西田敬

よほど以前の事、抗癌剤ifosfamideを用いた実験成績が目に留まったのか、態々、英国の学会から招請状が舞込んだ事がある。願っても無い。押っ取り刀で、板付：成田、Heathrow空港へと、飛行機を乗継ぎ、馳せ参じた。ロンドンで指定のHotelは“White House”と云う御大層な名前だが、こぢんまりした宿。部屋に着くと、名札付の、歓迎fruit basketが応接台に配置してある。間違い無い、茲だ。其の儘、案内された中華レストランでは歓待の船上宴会。テーブルを見て吃驚、眼を剥いた。御馴染の月桂冠の4合瓶、密栓の儘、人肌に御爛がしてある。日本人は己独り、他には居らん。日本酒に対する面子もあり、大和魂の發揮何処。代表して、プシューと云う音と共に（念を押す、

champagneではない)アルミキャップを捻り、開栓。爛酒が眼に滲みたのは、初めての経験!乾杯の儀式が終わるや、最寄りのwaiterを呼び寄せ、彼の耳元に、稍、低音で厳かに囁いた、May I have a glass of “scotch & water? Please. 斯くして歓迎の宴会と学会は滞りなく終了。

翌日、恥は掻き捨て。最早、ロンドンに長居は無用。次の寄航地、Linate空港(Milan)へと旅立った。ミラノでは予てより約束のIstituto Tumori Nazionale(国立腫瘍研究所)の所長、Prof. Di Reを訪問した、イタリア方式の卵巣癌、根治術式を具に見て、其の儘に掌握せんと目論むもの。茲でも到来の目的を全職員の面前で披露。ロンドンでの研究会の二番煎じで切り抜けた。臨時教授なる名札(name card)が配布され、身に付ける。途端に、胡散臭げな、職員の目付きが一変。擦れ違う毎に“CIAO”と挨拶される。いちいち、“ちやお”と、応ずるが、板に付かぬ事夥しい。特典は職員食堂は何を食っても無料。但し、全てcheese臭い。醤油と沢庵育ちの男には難行、苦行。殆ど、地獄の拷問。娘の餃子か崎陽軒の焼売を噛まずに丸飲みする覚悟でもあれば何とか為る。只管、忍従。

